

## 滋賀県湖北平野の農業用水路におけるタイワンシジミ種群 (*Corbicula fluminea*) とみられる二枚貝の生息状況

中川雅博・鈴木誉士・浅香智也（びわ湖サテライトエリア研究会）

タイワンシジミ (*Corbicula fluminea*) は、中国・台湾などを原産とする二枚貝である。国内では 1985 年頃に見つかり、1987 年頃には岡山県の水路で繁殖が確認された。1996 年に兵庫県加古川水系などで確認された後、関東・九州・四国の各地で定着が認められている。滋賀県においても、とくに琵琶湖の南湖沿岸で多く生息している。

タイワンシジミは、環境省により「被害に係る知見が不足しており、引き続き情報の集積に努める外来生物」として「要注意外来生物」に挙げられ、注意喚起されている。いまのところ、生態系に係る被害として、近縁な在来種であるマシジミの生息場でタイワンシジミが見つかる、3~4 年でマシジミが消失し、タイワンシジミに置き換わる現象が確認されている。これは、タイワンシジミが精子を大量に持ち水中に放精する特性に起因する。つまり、マシジミやタイワンシジミは精子側の遺伝子のみが遺伝する雄性発生型の繁殖特性を持つため、タイワンシジミの精子をマシジミが吸い込み受精すると、子供はすべてタイワンシジミになる。このような生物学的特徴をもつ本種は、分布拡大する能力が高く、アメリカでも数十年で広域に分布が拡大した。

タイワンシジミは外部形態において、在来種であるマシジミ、大陸産チョウセンマシジミに形態的に極めて類似し、見分けがつかないタイプが存在する。しかしながら、殻表面が黄から黄褐色で、殻の内側が白色にもかかわらず、側歯だけが明瞭に紫色になる「カネツケシジミ型」と言われるタイプがあり、これについては、同定が容易である。

演者らは、2000 年 1 月から毎月、魚類相調査をしている滋賀県湖北平野の農業用水路で、2013 年 11 月 16 日に「カネツケシジミ型」のタイワンシジミとみられる個体を多数採集した。同年 12 月 14 日には、水路の杭と杭の間（長さ 1.55m×水路幅 1.40m）に平均 45.0±23.4 個体 (n=3) を確認することができ、この水路 188m (263m<sup>2</sup>) に 5,760 個体が生息していると推定された。これは 1m<sup>2</sup>あたり、21 個体が生息することを示す。本発表は、毎月、魚類相調査してきた農業用水路において、しばしば二枚貝類にも注意を払っていた調査経験豊富な演者らでさえ、気がつかないうちに、侵入と定着を許してしまった「カネツケシジミ型」二枚貝とその生息状況について報告する。

この水路には在来魚が多く、ヨシノボリ類、シマドジョウ、タモロコ、カネヒラが多く採れ、ドジョウ、ウグイ、スナヤツメなどが続く。この水路は三面が護岸されているにもかかわらず、オオクチバスやブルーギルがほとんど、あるいはまったく侵入していない生物相豊かな水路である。また、マツカサガイ、タガイ、トンガリササノハガイといった貴重な二枚貝も多く生息するため、演者らは、今後、このタイワンシジミとみられる二枚貝の個体数の動向に注目していく。